

どう進めるの 学習評価 －授業実践と評価の工夫④－

回答・玉川大学教職サポートルーム客員教授 峯岸 誠

「社会的事象への関心・意欲・態度」の観点はどのように評価するのでしょうか？
また、各観点の配置はどのように考えたらよいのでしょうか？



A 「社会的事象への関心・意欲・態度」の観点はつい遅刻や忘れ物で評価していませんか。この観点の考え方を中央教育審議会教育課程部会報告（平成21年3月24日）の「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」（以下、「報告」）から確かめてみましょう。

この観点について「報告」は次のように示しています。

「主体的に学習に取り組む態度が学力の3つの要素の1つとして示されている。また、我が国の児童生徒の学習意欲について課題がある状況を踏まえると、（中略）さらに、主体的に学習に取り組む態度は、それをはぐくむことが基礎的・基本的な知識・技能の習得や思考力・判断力・表現力等の育成につながるとともに、基礎的・基本的な知識・技能の習得や思考力・判断力・表現力等の育成が当該教科の学習に対する積極的な態度につながっていく」と意義を説いています。このことについては本誌の2013年度2学期号の「観点別評価の4つの観点の相互関係」でも説明をしていますので参照してください。

それでは、この観点にそくした評価の対象や評価方法、時期についてどのように捉えたらよいのでしょうか。

評価の対象について、この観点は、「各教科が対象としている学習内容に関心をもち、自ら課題に取り組もうとする意欲や態度を児童生徒が身に付けているかどうかを評価する

ものである。評価に当たっては、各教科が対象としている学習内容に対する児童生徒の取組状況を通じて評価する」と示しています。

また、具体的な評価方法について、「授業や面談における発言や行動等を観察するほか、ワークシートやレポートの作成、発表といった学習活動を通して評価することが考えられる。その際、授業中の挙手や発言の回数といった表面的な状況のみに着目することにならないよう留意する」としています。また、「教師の指導により、学習意欲の向上はみられたものの」、「技能」や「思考・判断・表現」等に反映されていない場合は、「学習指導の一層の充実を図ることが重要である。その際、個人内評価を積極的に活用し児童生徒の学習を励ますことも有効である」としている点にも注目が必要です。

さらに、評価の時期については、「表面的な状況のみに着目することにならないよう留意するとともに、教科の特性や学習指導の内容等も踏まえつつ、ある程度長い区切りの中で適切な頻度で『おおむね満足できる』状況等にあるかどうかを評価するなどの工夫を行うことも重要である」と示しています。

これらをもとにして地理的分野を例にして考えてみましょう。国立教育政策研究所の「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【中学校社会】」（以下、「参考資料」）を使って考えてみましょう。

「参考資料」によれば地理的分野は、「内容のまとまり（単元）」を学習指導要領の中項目としています。教科書の章が該当します。

「参考資料」は、53頁から102頁にかけて「評価に関する事例」として6事例を紹介しています。ここでは、事例1と2を参考にして「観

点の配置」と「関心・意欲・態度」の評価のあり方についてみていきましょう。

「参考資料」の64頁に掲載されている事例1の「参考資料1」は、観点の配置を考えるとときにはたいへん参考になります。事例1は関東に所在する学校で、「日本の諸地域」の学習の最後に「関東地方」を配置しています。「知識・理解」は社会科学学習に共通する到達目標であるために全ての地方（小単元）に配置されています。

「関心・意欲・態度」は単元の始め「九州地方」と「関東地方」のみに配置されています。「九州地方」は、日本の諸地域学習の初めであり、単元全体の学習への意欲づけといえます。また、「関東地方」は単元のまとめです。教師が授業を改善・工夫することにより、生徒の学習内容への関心や意欲が態度化されて、「学習意欲の向上が図られ、『技能』や『思考・判断・表現』等に反映される」ことを「報告」では求めていますので、そのことを確認するための配置といえます。見方を変えれば、次の単元「身近な地域の調査」への意欲づけとしての配置ともいえます。

「思考・判断・表現」と「技能」はいずれか一つの観点を各地方の学習に配置しています。「九州地方」は、「関心・意欲・態度」と「知識・理解」、次の「中国・四国地方」は、「技能」と「知識・理解」です。ほかの地方については、「参考資料1」を参照してください。このような配置が、「報告」の示す「ある程度長い区切りの中で適切な頻度で『おおむね満足できる』状況等にあるかどうかを評価するなどの工夫」にあたります。

このように、観点の配置は学習の内容にそくして焦点化することが必要です。観点の焦点化は学習目標の焦点化であり、生徒にとってはわかりやすい授業となります。また、活動場面等の時間の確保にもつながります。

事例2は、「身近な地域の調査（全10時間）」です。地理的分野のまとめとして位置づけ、

習得された成果を活用する授業展開で「関心・意欲・態度」と「思考・判断・表現」の観点が重視されています。この展開の第3回は4時間構成で考察結果と将来予測の発表です。とくに地域の10年後を予想させる際には「関心・意欲・態度」を評価の観点とし、「身近な地域の特色を見いだし、将来の姿や課題について考察し発表する学習に意欲的に取り組み、自分なりに考えていこうとしているかを、発表やワークシートの記入内容で確認する（「参考資料」68頁）」としています。71頁には、「参考資料2」としてワークシートの例示、68頁には、「ワークシートにおける『地域的特色と将来予測』の記入例」も示されていますので参照してください。

ここでワークシートの意味を確認しておきましょう。「報告」でも評価方法として「ワークシートやレポートの作成、発表」を例示しています。しかし、ワークシートには次の条件が必要と考えます。

- ① 1枚の紙面に学習目標の提示、作業、まとめという50分の授業の流れが示されている。
- ② 生徒が思考したり、判断したりするための資料が明示されている。資料集や教科書の資料をスキャナーで取り込んでいる例が多くみられます。その操作に費やす時間を考えると「教科書〇〇頁の資料〇」という示し方でよいと考えます。
- ③ 生徒の思考や判断あるいは話し合いの結果などの学習活動（作業）を記述するスペースがある。この部分の存在がワークシートの中心です。グループ活動として話し合い活動を取り入れた場合は、この部分は話し合いの記録とそれを受けての個人の学びの成果を分けて記述させることが大切です。

ワークシートは、生徒が授業の振り返りを行う際に効果的であると同時に記録性という点から評価材としても有効です。